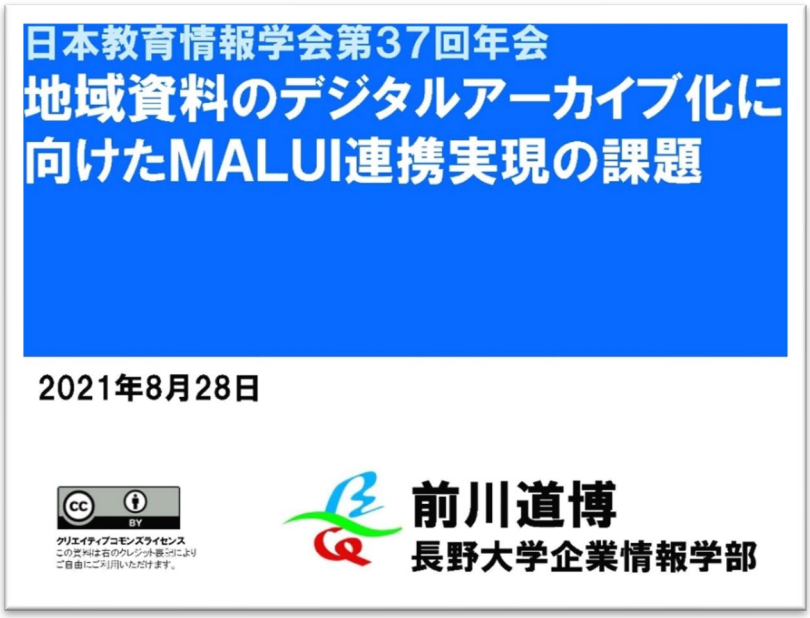
日本教育情報学会第37回年会・研究発表

地域資料のデジタルアーカイブ化に向けた MALUI 連携実現の課題

前川道博（長野大学企業情報学部教授）



日付：2021 年 8 月 28 日
会場：オンライン(主催校：岐阜女子大学)

長野大学の前川です。よろしくお願いいたします。

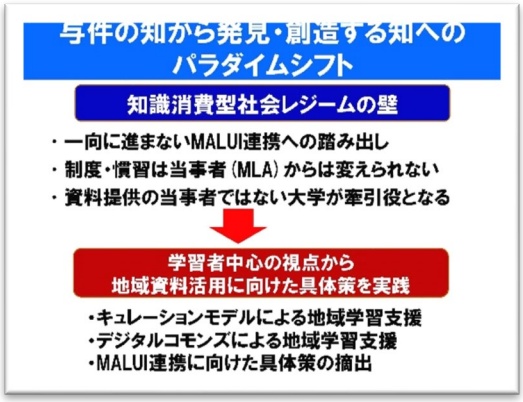
「地域資料のデジタルアーカイブ化に向けた MALUI 連携実現の課題」ということで発表をさせていただきます。

「MALUI(マルイ)」という言葉が世の中で基本的に認知されていないというのが現状ですね。「MALUI(マルイ)」、M ミュージアム、A アーカイブス、L ライブラリー、U ユニバーシティ、I インダストリーの頭文字です。これからのデジタルアーカイブを横断的に作っていきましょう、ということなんですけれども、一向に進んでいないというのが実情ですね。

まだそれぞれの施設はさまざまな施設中心で取り組みが行われているということなので、学習者から見るとそれぞれのところは全部バラバラで自分が赴いて学習をするという関係になるわけです。

今私たちも意識しつつ取り組んでいるのは知識循環型社会へのシフトということです。これは言うまでもなく、学習者中心に社会を組み立てていく。あるいはそれが望ましい形に変えていくということです。

そういう点で言うと、「ナレッジスペース」、「MALUI 連携」と言うのはまだまだその背後にあってそこにたどり着いていないという状況です。この「学習者中心の学び環境の実現」、ここが一つの大きな課題であるということです。

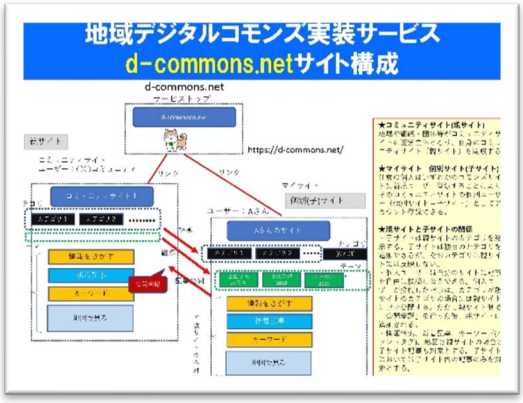


「与件の知」。すでにある体系としての知というものを享受するという学習パラダイムから現在は発見・創造する知恵へのパラダイムシフトが起きている。まさにこれが知識循環です。その背景にあってそれを阻んでいるのは知識消費型社会レジームの壁というものです。一方的に知識は与えられるものであるというものが非常に根強いということなので、主体を学習者の方にシフトさせて、そこから発想していきましょう、と言うのがここでの課題提起です。

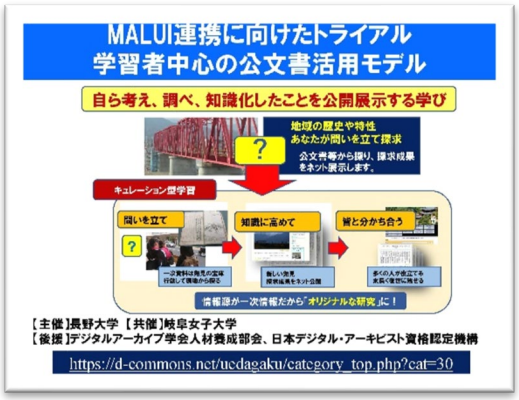
それを支援するためのメディア環境というものを私たちは構築をしています。それは「分散型デジタルコモンズ」という概念で提起しているものです。

ここにあるように、それぞれの学習者、それから教える人や先生なども含めてみんなが情報を出し合う。資料を出し合う。そしてギブ and テイクしあうというものですね。これをネット上でリサイクリング、循環させていこうというものになるわけです。

昨年度から具体的に始めたものがこの「信州上田デジタルコモンズ」というものです。インターネット上には「みんなでつくる信州上田デジタルマップ」を公開して、それを学習者に利用してもらうという形で進めています。



これの仕掛けを説明するのは時間がとられますので、ここでは説明を省略しますけれども、学習者一人一人が自分のマイサイト（ｅポートフォリオ）というものを持って、そこにデジタルアーカイブを構築できる環境を持って構築していく。学習成果をまとめていく。それが全体が束なって共有されるというのがこの仕掛けになっています。



MALUI 連携。MALUI と言っても非常に多様なものなので、私たちは今年（2021 年）2 月に上田市公文書館との連携した講座というものを試みました。「学習者中心の公文書活用モデル」という一つのチャレンジというねらいを兼ねて実施したものです。

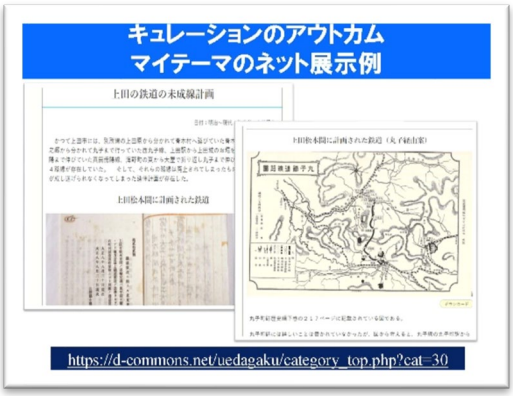
学習者それぞれが自分が探求した課題というものを持って探求したいと思っているわけですけれども、これを二次資料で受け売りするというものではなくて、その大元にある一次資料にアクセスをして、(歴史的事実などが)「実際どうだったんだろうか」ということを探求していくということですね。そのために一次資料にアクセスするわけですけれども、自分

で考えたこと、調べたこと、知識化したことをまとめて公開する。キュレーションする。これをネット上にキュレーションするという形の講座として実施をしました。

これに関しては、岐阜女子大学さんの御協力をいただきまして、井上先生、久世先生からもご支援いただきまして進めました。ありがとうございました。

（受講者は）地元上田などの方が多かったんですけれども、それ以外にもネットですので全国から参加する方がいらっしゃいまして、それぞれの地元の地域資料を使った地域の探求に取り組んでもらいました。その中で特に上田市公文書館の資料については、「こういうことを調べたい」と、「この資料を実際に見たい」というリクエストをいただきました。これはネット講座ですので、実物にアクセスするのは実際には難しいわけです。ここはひとつ、私たちが介在をして、リクエストのあった資料を私たちが請求をして、デジタル化して学習者にフィードバックするという方法をとりました。

その資料を使って受講者それぞれの方が自分の課題・関心に沿った探求を行ったという形です。そのプロセスで地域資料がデジタル化され共有されるという形で補完をしたわけなんですけれども、このような形で公文書館の資料が学習講座を通してデジタル化され公開される形で実行されたのは、おそらく（全国で）初めてではないかと考えています。

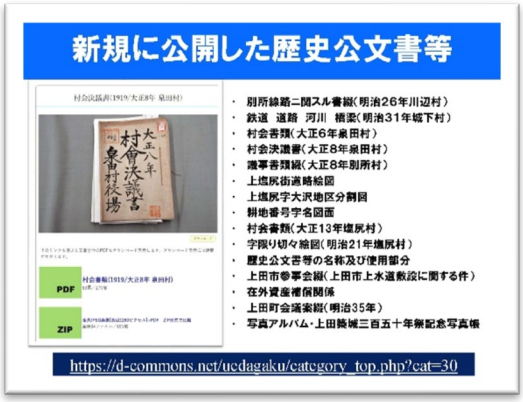


これは実際に受講者が作ったもののキュレーションの例です。上田に鉄道が通る予定があったと。これは明治大正の頃なんですけれども、鉄道計画があったと。松本まで通す計画があったということも発見されてくるということです。これを一次資料から起こしていくことがこれからの地域探求型のキュレーション学習の一つのチャレンジになる。こういった取り組みがもっと広がっていくといいかなと思っているわけです。

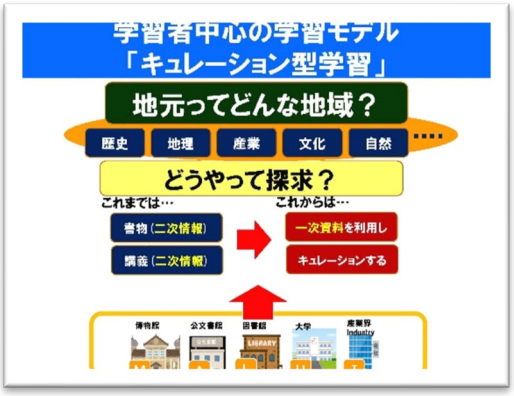
実際には資料は非常に膨大なんですよね。それから公文書館の場合には、いわゆる役場にあった資料を束ねるという形をとっているので、本当に知りたい資料はその束ねた中の一部にしか過ぎないわけです。あるいはないかもしれない。そういったものも含めて、とにか

くデジタル化しないことには中身の検証のしようがないので、これは私や学生がスタッフとなってフォローアップするという形にしました。これは非常にある意味、効率よく、というか、デジタル化をして共有することが実際にできました。

それから資料の中には、公開されてはまずいというような個人情報などを含んでいるようなところもありますけれども、これは公文書館の方でそういったところはあらかじめ伏字にして提供（閲覧に供）されるという形をとりますので、そういう点でも私たちはその資料を安心して扱い公開しやすくなったというメリットが同時にありました。大学、学生が関与することによって利用できると。これは MALUI 連携の「A」（公文書館）ですけれども、大学が関わると「A」「U」というつながりなんですね。この取り組みが実際にできました。



驚くことにわずか数回の講座だったんですけれども、この時だけでも１５点の資料を公開できたと。これは非常に大きな手ごたえだったかな、と思います。それからこういったデジタルアーカイブ構築というのは、かなり大掛かりな、あるいは業者委託のような形になりやすいんですけれども、そうするとこういうものの推進は難しくなるんですよね。ですから学習者側に立った資料の引き出し、これが一つのソリューションになるのかな、と考えています。



この「学習者中心の学習モデル」、「キュレーション型学習」というモデルとしてもっと普及させていきましょう、と言うのが私たちの考えです。「地元ってどんな地域なんですか？」という、例えばこういうシンプルな問いですよね。ここからどんどんと探求を深めていくことができるわけです。

これまでは二次資料、書物あるいは講義という形で間接的に知識化されたものを受け取っていたわけですけれども、これからはより大元にある一次資料にアクセスしてキュレーショ

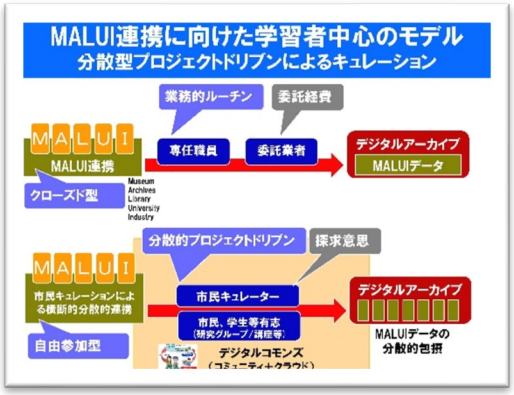
ンしていく。それによってもっと MALUI というものの有用性というものが向上していくわけです。

公文書館との連携というところでの課題もかなり見えてきました。「活用改善の道筋は言えている」ということなんですけれども、挙げ出すと切りがない。時間がな限られていますので簡略に済ませたいと思います。

近現代の資料が手付かずである。これは非常に大きい課題です。デジタル社会になって資料活用の公開が急務になってきている。これは極めて重要な視点かと思っています。

それから地域史研究、学習のパラダイムシフトということなんですけれども、これまでは地域史を研究する専門の研究者がいて主導してきていた。もっとこれを学習者のところに裾野を変えていくということですね。

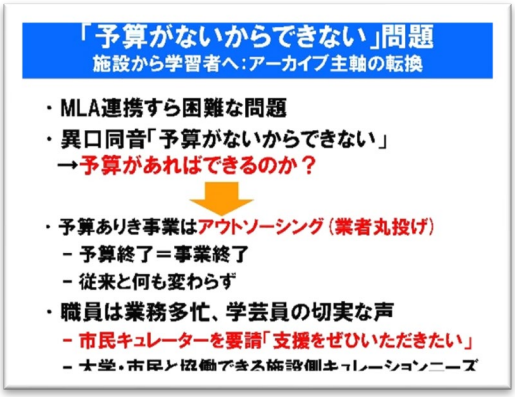
それと同時にかなり制度的な縛りを受けているという課題も痛感をしています。制度を変え、活用できる文書館にチェンジする。いろいろやりたいことはあるんですけれども、条例で縛られているんですよね。ですからここはもっと施設を活用しやすくするための条例の改正などが必要かなというところを私も痛感しています。



これまでのデジタルアーカイブは施設中心ということでクローズドに行なわれる。施設の中で専任職員が、あるいは業者委託で行なわれるという形なんですけれども、これからは学習者が中心となってそれぞれの施設にある資料などを活用しネットへ公開していく。これは「分散型プロジェクトドリブン」という難しい言い方にしましたけれども、学習者主体で活用していくというモデルです。

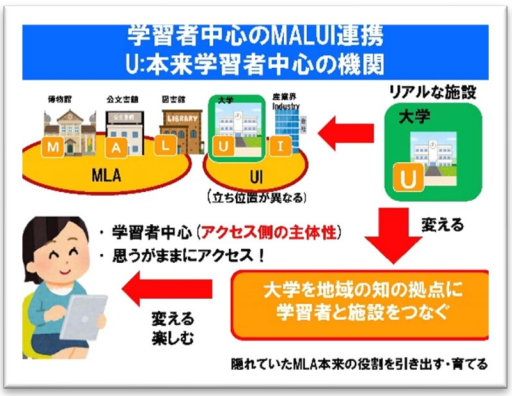
このモデルは、実は 2020 年度に私が担当した（長野大学の）地域学講座「信州上田学」で実践をしています。その中で地域資料、特に地元を知るために必要な基礎資料というのはいくつかあります。それは優先的に公開する必要がある。必要に迫られて公開するという取り組みを昨年度は行いました。

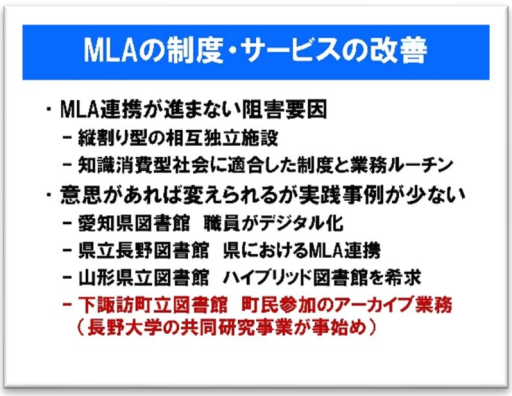
それから学習者、参加ユーザーも自分から資料を投稿できるので、こういうことによってお互いに資料を出し合うということができるわけです。その中に MALUI、それぞれの施設が加わっていくとなおいいかな？　というのが「協働的公開」の方向性です。



これよく言われるんですけれども、「デジタルアーカイブ取り組んでください」と言うと「予算がないからできません」と異口同音に出るんですよね。これもっとよく考えていただきたいと思っています。「予算があればできるのか？」ということです。

予算があるとどういうソリューションになるかと言うとアウトソーシングなんです。言い方は悪いですけれども、業者丸投げです。すると施設というものは旧態依然で何も変わらない。実はここには大きな課題があります。これは地元の美術館の学芸員の方とも意見交換をし、切実な声を聞きました。学芸員は手が回らないということなんですね。「ぜひ市民の側の支援をいただきたい」ということでした。

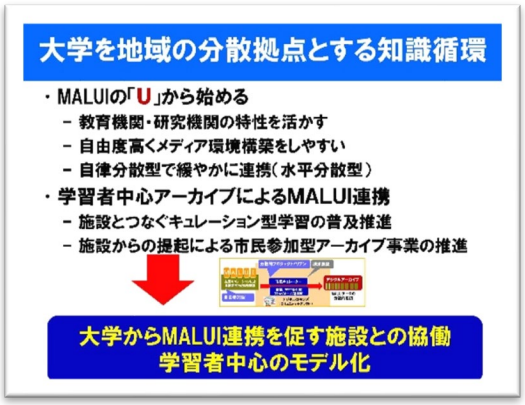




「学習者中心の MALUI 連携」。これを大学が中心になって進めていくと、ここは大きくシフトしやすいということです。これが一つの大きな課題提起です。

この MLA（博物館・図書館・公文書館）なんですけども、やはりなかなか進まないんですよね。ですけれども、意識があれば変えられるというのは、実践事例は少ないですけれども、いくつか私も見聞をしています（愛知県図書館、県立長野図書館、山形県立図書館など）。

特に私たち、長野大学と一緒に取り組んだ下諏訪町立図書館です。ここは町民参加のデジタルアーカイブ業務というのを進めています。このような参加型アーカイブサイト（『みんなでつくる下諏訪町デジタルアルバム』）を作って、みんなで資料を出し合うということをやっているんですけれども、（活動が）地に足が着いてきて成熟しつつある。私たちも応援したいと思っている取り組みの一つです。



まとめなんですけれども、「大学を地域の分散拠点とする知識循環」。まず MALUI の「U」から始めましょうということです。なぜ大学かと言うと、教育機関であり研究機関であり柔軟に対応しやすい、横断しやすいということです。水平な自律分散型の取り組みを緩やかに連携できるということです。

「学習者中心アーカイブによる MALUI 連携」、これを進めていく。大学から MALUI 連携を促す施設との協働。先ほどの上田市公文書館のようなケースの取り組みです。それから下諏訪町立図書館のような取り組みです。そして「学習者中心のモデル化」、これによって

MALUI 連携が先に進んでいくとよいのではないか。さらにその探求、提案を進めていきたいと思います。

私の発表は以上です。